

は女性がどの程度労働市場に参入するかが、労働力率向上のカギとなり、

日本は労働力不足の瀬戸際にあると
 いったよい。

表 9. 就業者数部門別推移 (10 万人)

	実 績					予 測				2010~2030 年変化率
	1990	1995	2000	2005	2010	2015	2020	2025	2030	
総合計	642.7	668.6	652.5	639.2	629.9	622.5	615.5	612.1	608.8	-3.3
農林水産・鉱業	56.0	46.9	37.6	32.1	28.8	24.2	21.5	19.9	18.2	-36.9
製造業計	146.7	136.7	123.2	108.3	100.0	95.7	88.7	84.3	80.0	-20.0
食料・飲料	15.2	15.7	15.1	14.1	13.3	12.9	12.1	11.4	10.6	-20.2
繊維・パルプ・木製品	27.1	22.8	17.4	12.5	9.7	7.6	6.3	6.0	5.8	-40.2
化学	5.6	5.6	5.4	4.5	4.4	4.1	3.8	3.6	3.5	-20.2
ゴム・樹脂・窯業	13.7	13.2	12.1	10.3	9.4	8.9	8.4	7.9	7.4	-21.0
鉄鋼・非鉄・金属製品	18.0	17.3	15.2	13.7	12.6	12.1	11.0	10.2	9.5	-25.0
機械機器	42.6	38.5	36.6	32.4	31.0	30.2	28.5	27.3	26.0	-16.0
輸送機器	12.0	11.6	11.0	12.2	12.5	13.4	12.8	12.7	12.6	0.8
その他製造	12.6	12.0	10.6	8.6	7.1	6.5	5.8	5.2	4.6	-35.2
サービス業計	440.0	484.9	491.7	498.8	501.0	502.6	505.2	507.9	510.6	1.9
建築・土木	61.7	69.3	63.9	55.7	49.2	45.6	43.0	40.3	37.6	-23.5
電気・ガス・水道	4.0	4.4	4.5	4.3	4.2	4.0	4.1	4.1	4.1	-1.3
商業・金融・不動産	135.0	141.6	134.8	124.6	125.3	122.5	123.3	124.1	124.8	-0.3
運輸・通信・情報	45.6	49.2	50.6	51.2	53.3	54.0	54.4	54.7	55.1	3.5
公務・教育・医療他	83.6	93.2	102.0	116.5	118.5	123.8	127.5	131.2	134.9	13.9
対事業所サービス	35.9	43.7	48.5	57.6	64.2	68.6	71.0	73.4	75.7	18.0
対個人サービス・他	74.3	83.5	87.4	89.0	86.5	83.9	82.1	80.2	78.3	-9.5
労働年齢人口	1008.9	1051	1083.6	1100.8	1111.1	1106.8	1094.5	1073.3	1045	-5.9
労働参加率	63.3	63.4	62.4	60.4	59.7	59.5	60.0	60.6	61.1	n.a.
労働力人口	638.4	666.6	676.6	665.1	663.2	658.7	657.1	650.1	638.5	-3.7

図 12. 製造業部門就業者数推移 (10 万人)

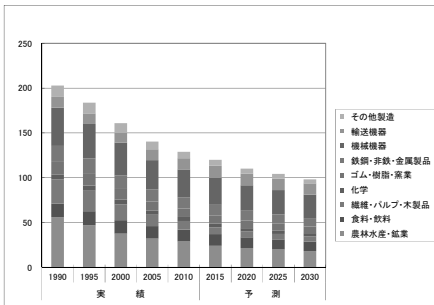
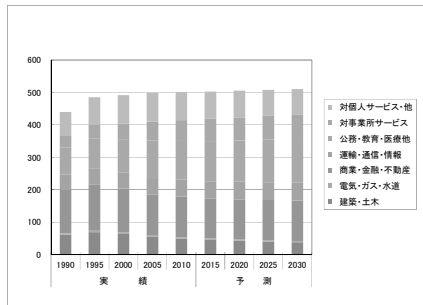


図 13. サービス部門就業者数推移 (10 万人)



＜就業者所得：賃金＞

就業者所得（名目、以下、賃金）全体では2010年から2030年の間に年率0.02%減とほぼ横ばいに推移するが、製造業では1.35%減と比較的大きく減少し、逆にサービス業は0.22%増と微増を示している（表10、図14）。その結果、2010年では製造業の賃金合計1に対しサービス業のそれは4.9と5倍弱であったものが、2030年には約6.7倍とサービス業で支払われる賃金の比重が高まる。

就業者一人当たり賃金で見ると、全体として変化の幅はわずかである。2010年から2030年の間、全産業では年率0.15%増、サービス業では0.12%増と横ばいであるのに対し、製造業では0.24%減と下落する（表

11）。サービス業と製造業の一人当たり賃金を比べると、2010年には製造業のほうが2.9%高かったが、2030年にはサービス業のほうが4.3%高くなる。製造業における就業者数の減少はあるものの、それを上回る速度で一人当たり賃金が縮小するためである。サービス業は海外との競争にさらされにくいのに対し、製造業はより強く海外からの競争にさらされているためであろう。一人当たり賃金の低下が目立つのは食料・飲料、輸送機器部門、商業・金融・不動産部門である。なお、表12にみるとおり、一人当たり賃金が実質ではマイナスの伸びとなっている。これは消費者物価の上昇が一人当たり賃金の上昇を上回るためである。

表10. 就業者所得（賃金）

（単位：兆円）

	実 績					予 測				2010-2030年 平均伸び率%
	1990	1995	2000	2005	2010	2015	2020	2025	2030	
総合計	232.3	270.1	272.7	258.8	243.7	251.6	249.0	245.9	242.6	-0.02
農林水産・鉱業	1.9	1.5	1.3	1.2	1.2	1.2	1.1	1.0	1.0	-0.84
製造業計	51.4	53.1	51.4	46.6	41.4	38.4	35.6	33.5	31.5	-1.35
食料・飲料	4.6	5.1	5.1	4.6	4.6	4.4	4.1	3.6	3.2	-1.84
繊維・パルプ・木製品	6.6	6.0	4.6	3.4	2.8	2.3	1.9	1.8	1.7	-2.36
化学	3.4	3.5	3.2	3.0	2.9	2.6	2.5	2.4	2.2	-1.27
ゴム・樹脂・窯業	4.4	5.0	4.6	4.5	4.0	3.7	3.4	3.2	3.0	-1.40
鉄・非鉄金属製品	8.9	8.9	8.3	8.1	6.9	6.6	6.0	5.6	5.2	-1.41
機械機器	14.1	15.0	15.8	13.6	10.9	10.8	10.0	9.4	8.7	-1.13
輸送機器	5.6	6.1	6.4	6.5	6.4	5.4	5.4	5.4	5.5	-0.80
その他製造	3.7	3.5	3.4	3.0	2.8	2.6	2.3	2.1	2.0	-1.78
サービス業計	179.0	215.5	219.9	210.9	201.2	212.0	212.3	211.3	210.1	0.22
建築・土木	23.6	29.3	26.8	22.3	18.4	19.5	19.7	18.4	17.0	-0.39
電気・ガス・水道	4.1	4.6	4.7	4.7	4.3	4.4	4.4	4.4	4.3	0.00
商業・金融・不動産	56.0	64.4	59.6	56.0	48.3	50.8	47.1	45.3	43.6	-0.51
運輸・通信・情報	22.3	26.3	28.3	27.1	26.5	28.6	28.9	28.7	28.6	0.39
公務・教育・医療他	45.5	58.7	64.0	64.8	67.8	71.5	74.4	76.0	77.3	0.65
対事業所サービス	13.6	16.2	19.4	21.1	21.6	22.7	23.5	24.3	25.0	0.75
対個人サービス・他	13.8	16.0	17.1	14.9	14.4	14.5	14.4	14.3	14.2	-0.04

表 11. 就業者一人当たり賃金

(単位：万円)

	実 績					予 測				2010-2030年 平均伸び率%
	1990	1995	2000	2005	2010	2015	2020	2025	2030	
総合計	3614.1	4040.0	4178.6	4049.3	3869.6	4041.6	4045.9	4017.3	3984.8	0.15
農林水産・鉱業	331.8	313.1	349.0	386.6	408.2	477.7	503.7	520.8	546.4	1.47
製造業計	3505.4	3886.0	4172.7	4306.7	4136.2	4013.6	4014.2	3978.5	3938.5	-0.24
食料・飲料	3067.6	3280.8	3356.0	3288.4	3473.7	3405.1	3367.3	3198.5	3003.3	-0.73
繊維・パルプ・木製品	2449.5	2625.7	2663.8	2685.6	2878.7	2987.3	3084.1	3041.4	2988.1	0.19
化学	6031.8	6271.8	6066.1	6616.9	6620.2	6348.9	6463.8	6463.1	6431.1	-0.14
ゴム・樹脂・窯業	3206.1	3832.9	3805.8	4340.5	4300.5	4112.2	4048.6	4062.4	4101.6	-0.24
鉄・非鉄金属製品	4965.0	5141.1	5456.4	5902.2	5448.7	5479.9	5493.9	5477.9	5468.1	0.02
機械機器	3312.2	3893.9	4312.9	4186.3	3519.5	3594.9	3507.6	3429.1	3340.9	-0.26
輸送機器	4693.7	5220.7	5828.6	5341.5	5143.9	4005.6	4230.3	4299.5	4350.1	-0.83
その他製造	2937.8	2897.3	3237.6	3524.1	3939.7	4042.4	3917.7	4048.4	4250.5	0.38
サービス業計	4068.0	4444.3	4472.8	4229.2	4015.5	4218.2	4202.1	4160.5	4114.6	0.12
建築・土木	3832.3	4227.2	4194.2	4003.0	3731.9	4272.9	4575.0	4554.5	4510.6	0.95
電気・ガス・水道	10469.9	10340.5	10565.7	11071.1	10370.3	10850.2	10792.7	10647.6	10500.8	0.06
商業・金融・不動産	4144.0	4546.3	4421.7	4497.9	3854.1	4149.1	3817.1	3648.4	3494.3	-0.49
運輸・通信・情報	4896.9	5350.8	5580.0	5297.5	4972.6	5287.1	5315.3	5252.1	5194.8	0.22
公務・教育・医療他	5450.4	6302.2	6272.8	5558.1	5724.9	5777.4	5836.8	5793.9	5728.2	0.00
対事業所サービス	3787.3	3711.9	4000.5	3664.2	3360.0	3304.9	3311.7	3310.3	3306.0	-0.08
対個人サービス・他	1856.1	1916.6	1962.9	1677.4	1660.5	1729.6	1751.7	1784.2	1819.8	0.46

＜家計消費＞

家計可処分所得は賃金および営業余剰から推計されるが、その推移は表 12 のとおりである。2010-2030年の年平均伸び率で見ると、家計消費および可処分所得の変化は非常にわずかであるが、実質ではマイナスである。これは人口の縮小を反映したもので、一人当たりで見るとわずかにプラスとなっている。

一人当たり賃金が実質ではマイナスの伸びとなっているのに、一人当たり可処分所得（実質）はプラスの伸び

であるのは、貯蓄率の低下および資産所得の増加であると考えられる。

家計消費の内訳を見ると、2010年から2030年にかけて、製造業のシェアは20.1%から16.6%へと大きく低下し、サービス業のシェアは78.8%から82.5%へと拡大する（表 13）。製造業では唯一シェアが拡大しているのは電気機器の中のコンピュータ・通信機器である。サービス業は、商業および対個人サービスのシェアは低下しているが、他の多くの部門でシェアが拡大している。

図 14. 製造業・サービス業賃金推移
(単位：兆円)

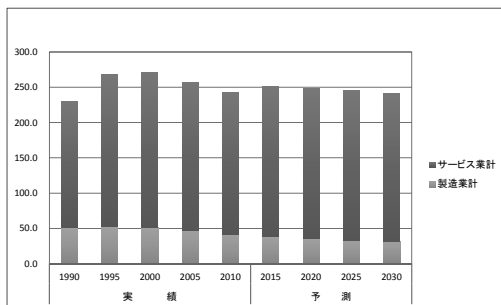


表 12. 可処分所得と貯蓄

(単位：2005 年価格および名目、兆円、一人当たり 10 万円)

	実 績					予 測				2010～30年 平均成長率
	1990	1995	2000	2005	2010	2015	2020	2025	2030	
雇用者所得(実質)	246.8	268.2	266.5	258.8	244.7	236.2	222.1	217.2	212.4	-0.70
可処分所得(名目)	261.9	301.7	300.7	290.0	287.5	310.3	312.6	313.6	314.3	0.45
貯蓄(名目)	30.0	32.5	20.7	4.2	5.7	16.8	14.3	12.4	11.1	3.43
貯蓄率(%)	11.3	10.6	6.8	1.4	2.0	5.5	4.6	4.0	3.6	n.a.
家計消費支出(名目)	235.7	272.9	282.8	285.3	279.8	289.9	293.7	296.4	298.3	0.32
可処分所得(実質)	265.9	298.1	294.4	290.0	290.8	296.3	286.4	284.1	281.7	-0.16
貯蓄(実質)	30.4	32.1	20.2	4.2	5.7	16.0	13.1	11.3	10.0	2.80
実質家計消費(実質)	250.7	266.1	274.3	280.9	278.1	273.7	266.2	265.7	264.7	-0.25
雇用者一人当たり賃金	36.7	39.9	40.9	40.5	39.1	38.6	37.1	36.4	35.7	-0.46
一人当たり可処分所得(実質)	21.4	23.6	23.0	22.5	22.7	23.4	23.1	23.5	24.2	0.31
一人当たり消費(実質)	20.1	21.0	21.5	21.8	21.7	21.6	21.5	22.0	22.7	0.22

注：雇用者所得、雇用者一人当たり賃金は消費者物価で実質化

表 13. 実質家計消費部門別構成比

(単位：%)

	実 績					予 測			
	1990	1995	2000	2005	2010	2015	2020	2025	2030
総合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
農林水産	1.5	1.3	1.3	1.1	1.1	1.0	1.0	0.9	0.9
鉱業	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
製造業計	22.9	23.1	21.5	20.2	20.1	19.0	17.6	17.1	16.6
食料・飲料	10.7	11.2	10.4	9.5	9.2	9.0	8.9	8.6	8.2
繊維	3.2	2.2	1.9	1.3	1.1	0.9	0.4	0.3	0.3
木製品・パルプ	0.3	0.3	0.3	0.2	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1
化学品	1.0	1.0	1.0	0.9	1.0	1.1	1.1	1.1	1.2
石油・石炭製品	1.6	2.0	2.1	2.1	1.9	1.7	1.8	1.7	1.7
ゴム・プラスチック	0.4	0.4	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2
ガラス・セメント他	0.1	0.1	0.1	0.1	0.0	0.1	0.0	0.0	0.0
鉄鋼業	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
非鉄金属	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
金属製品	0.2	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0
一般・特殊機械	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
電気機器	1.1	1.7	1.9	2.4	3.8	3.5	3.5	3.5	3.6
コンピュータ・通信機	0.1	0.2	0.5	0.7	1.0	1.3	1.4	1.4	1.5
輸送機器	2.3	2.3	1.8	2.0	1.5	1.3	0.9	0.8	0.8
自動車	2.2	2.2	1.7	1.9	1.5	1.2	0.9	0.8	0.7
精密機器	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.2	0.2
その他製造業	1.6	1.3	1.1	0.9	0.7	0.6	0.3	0.3	0.3
サービス業計	75.7	75.5	77.3	78.6	78.8	80.0	81.4	82.0	82.5
建築・土木	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
電気	1.1	1.6	1.8	1.6	1.8	1.9	2.0	2.0	2.0
ガス	0.4	0.4	0.4	0.5	0.5	0.6	0.6	0.6	0.6
水道・廃棄物処理	0.7	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8	0.8
商業	15.2	17.4	16.1	16.7	15.5	15.1	13.9	13.6	13.3
金融・保険	3.1	2.8	3.6	4.3	3.7	3.7	4.0	4.1	4.1
不動産・帰属家賃	18.3	20.0	20.6	20.6	21.8	22.2	23.6	24.0	24.2
運輸	4.6	5.7	5.3	5.3	5.1	5.6	5.7	5.6	5.5
通信	1.0	1.4	2.5	2.9	3.8	4.0	4.2	4.2	4.2
情報	0.5	0.5	1.0	1.0	1.4	1.5	1.6	1.7	1.8
公務	0.2	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	0.4	0.4
教育・研究	2.6	2.7	2.5	2.7	2.6	2.8	2.8	2.8	2.8
医療・保健・介護	9.6	4.0	3.7	4.3	5.0	5.6	5.8	6.4	6.9
その他公共サービス	1.2	1.3	1.1	1.4	1.3	1.6	1.7	1.7	1.7
対事業所サービス	1.2	1.4	1.8	1.7	1.8	1.9	2.1	2.2	2.3
対個人サービス	15.8	15.4	16.0	14.5	13.3	12.5	12.5	12.1	11.8
その他	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0

＜民間設備投資＞

産業連関表の最終需要に含まれる民間総固定資本形成は、どのような資本財が需要されているか（資本財供給サイド）をあらわしたデータであるが、これを固定資本マトリックスによって、どの産業がいくら投資したか（資本財需要サイド）のデータに変換できる。このようにして変換された産業部門ごとの民間設備投資をみると表 14、図 14 のとおりである。2010-2030 年間の年平均伸び

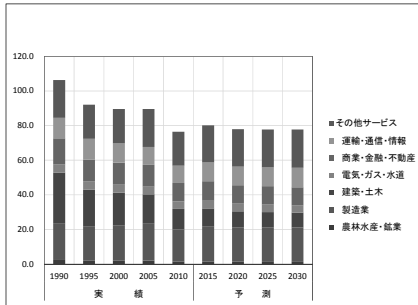
率で見ると、全産業では 0.08% 増とほぼ横ばいに推移している。製造業は東日本大震災の復興投資の影響もあって、2010 年代半ばにやや盛り上がりを見せ、2020 年以降は横ばいとなり、2010-2030 年間の年平均伸び率は 0.36% 増と低い伸びにとどまる。サービス業投資は、この間の年平均伸び率で 0.01% 増とほぼ横ばいである。その要因は建築・土木、ガス、不動産・帰属家賃、教育・研究部門の投資縮小である。

表 14. 民間設備投資

(単位：2005 年価格、兆円)

	実 績					予 測				2010~30 年平均成
	1990	1995	2000	2005	2010	2015	2020	2025	2030	
総合計	106.4	92.1	89.6	89.6	76.5	80.2	77.9	77.7	77.8	0.08
農林水産	2.3	1.9	1.8	1.9	1.5	1.5	1.3	1.3	1.3	-0.80
鉱業	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	-0.41
製造業計	21.2	20.0	20.6	21.7	18.5	20.3	19.7	19.7	19.9	0.36
食料・飲料	1.8	1.7	1.8	1.9	1.7	1.8	1.6	1.6	1.6	-0.08
繊維	0.4	0.3	0.4	0.4	0.3	0.4	0.4	0.4	0.4	0.64
木製品・パルプ	0.7	0.6	0.6	0.6	0.5	0.6	0.5	0.5	0.5	-0.37
化学品	2.1	2.1	2.2	2.3	2.1	2.2	2.1	2.1	2.1	0.23
石油・石炭製品	0.4	0.4	0.4	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.13
ゴム・プラスチック	1.2	1.1	1.1	1.1	0.9	1.0	1.0	1.0	1.0	0.55
ガラス・セメント他	0.4	0.4	0.4	0.4	0.3	0.4	0.3	0.3	0.3	-0.26
鉄鋼業	1.1	1.0	1.1	1.1	0.9	1.0	1.0	0.9	0.9	-0.17
非鉄金属	0.4	0.4	0.4	0.4	0.3	0.3	0.3	0.3	0.3	-0.13
金属製品	1.1	1.0	1.0	1.0	0.8	0.9	0.8	0.8	0.8	0.44
一般・特殊機械	1.9	1.6	1.7	1.8	1.5	1.7	1.7	1.7	1.7	0.47
電気機器	4.6	4.6	4.8	5.3	4.5	5.0	5.0	5.0	5.1	0.60
コンピュータ・通信機	3.2	3.1	3.2	3.6	3.0	3.3	3.3	3.3	3.3	0.57
輸送機器	3.6	3.2	3.3	3.3	2.7	3.0	2.9	2.9	2.9	0.40
自動車	3.1	2.8	2.8	2.9	2.3	2.6	2.4	2.4	2.5	0.36
精密機器	0.4	0.4	0.5	0.5	0.4	0.5	0.5	0.5	0.5	1.00
その他製造業	1.1	1.0	1.1	1.2	1.0	1.2	1.2	1.3	1.3	1.13
サービス業計	82.7	70.2	67.1	65.9	56.4	58.3	56.8	56.6	56.6	0.01
建築・土木	29.3	21.1	18.7	16.6	11.8	10.2	9.5	9.0	8.5	-1.62
電気	3.8	3.8	4.0	3.6	3.6	3.7	3.6	3.6	3.6	0.06
ガス	0.7	0.8	0.7	0.7	0.6	0.6	0.6	0.5	0.5	-0.80
水道・廃棄物処理	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.2	0.03
商業	5.0	4.4	4.6	4.9	4.3	4.8	4.5	4.5	4.6	0.29
金融・保険	0.7	1.3	1.8	2.2	2.3	2.5	2.5	2.5	2.6	0.45
不動産・帰属家賃	9.3	6.6	6.0	5.4	3.9	4.0	3.7	3.5	3.2	-0.98
運輸	6.7	6.2	5.6	5.3	5.0	5.3	5.3	5.4	5.5	0.49
通信	3.9	4.6	4.0	3.4	3.5	3.7	3.7	3.8	3.9	0.62
情報	1.2	1.4	1.5	1.7	1.6	1.7	1.7	1.8	1.8	0.56
公務	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	n.a.
教育・研究	3.4	2.7	2.6	2.7	2.2	2.3	2.2	2.1	2.0	-0.52
医療・保健・介護	5.4	4.6	4.5	4.7	4.0	4.3	4.2	4.2	4.1	0.05
その他公共サービス	0.6	0.5	0.4	0.4	0.3	0.4	0.4	0.4	0.4	0.50
対事業所サービス	7.8	7.8	8.0	9.3	8.7	10.0	10.3	10.7	11.1	1.21
対個人サービス	4.5	4.1	4.2	4.7	4.2	4.5	4.5	4.5	4.6	0.40
その他	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	-1.25

図 15. 主要産業別民間設備投資推移
(単位：2005 年価格、兆円)



<輸出と輸入>

輸出入は為替レート、エネルギー価格、世界経済の動向など、不確定要素の影響が大きく、長期の予測は難しい。本モデルでは為替レートは2014年の実績で2030年まで固定し、エネルギー価格、世界の対日需要、輸入価格は緩やかな上昇を仮定⁹している。

表1にみられるとおり、日本経済は2014年以降マイナス成長に陥り、消費、投資、国内生産すべてマイナス成長に推移する。この中で日本経済の成長を支える唯一の要因である輸出は、2010年以降2013年まで比較的高い伸びを示すが、2014年以降2030年までほぼ横ばいに推移する(表15)。国内消費と異なり、輸出

においては製造業の伸びがサービス業の伸びを上回る。製造業の中でも一般・特殊機械、輸送機械、その他製造業の伸びが比較的高く、かつて日本の得意とした電気機器は横ばいで推移する(図16)。サービス輸出においては商業がその半ばを占め、次いで運輸が3割を占めるが、いずれもプラスの伸びとなっている。

輸入の推計は、本モデルでは、国内需要が先決され、その需要のうちの何割を輸入により充たすかを定める輸入シェア関数に基づき、国内生産と同時に決定される。

推計結果をみると、輸入全体は2010年以降2015年まで比較的高い伸びを続け、それ以降は横ばいに推移する。輸入の伸びは輸出のそれを

上回り、貿易収支は赤字に転化する。製造業の輸入の伸びは輸出のそれを上回り、一般・特殊機械、電気機器、化学品、輸送機器の伸びが大きい(表16、図17)。特にコンピュータ・通信機器を含む電気機器は過去に急激

なシェアの拡大をみたが、2010年以降は安定的に推移するといえよう。サービス輸入においても輸出と同じく商業および運輸がその大部分を占め、プラスの伸びを維持するが、製造業計の伸びには及ばない。

表 15. 実質輸出部門別推移

(単位：2005年価格、兆円)

	実績					予測				2010～30年平均成長率
	1990	1995	2000	2005	2010	2015	2020	2025	2030	
総合計	38.6	43.2	53.8	73.8	80.6	86.5	86.3	85.5	85.7	0.31
農林水産・鉱業	0.1	0.0	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.1	0.48
製造業計	30.4	34.1	42.2	56.0	63.3	68.2	68.1	67.7	68.0	0.36
化学品	1.9	2.8	3.5	4.9	5.4	5.5	5.5	5.5	5.5	0.12
一般・特殊機械	4.1	4.5	5.7	7.4	7.4	8.9	8.7	8.5	8.5	0.66
鉄鋼・非鉄・金属製品	3.0	4.1	4.6	5.5	6.9	7.2	7.1	7.0	7.0	0.11
電気機器	6.8	9.1	12.0	16.3	19.2	19.4	19.4	19.3	19.4	0.05
輸送機器	10.6	9.4	11.6	15.4	16.5	18.5	18.6	18.5	18.6	0.61
その他製造業	4.1	4.2	4.8	6.7	8.0	8.8	8.9	8.9	9.1	0.64
サービス業計	8.1	9.1	11.5	17.6	17.2	18.2	18.0	17.7	17.6	0.11
商業	1.9	2.9	4.5	8.8	8.9	9.3	9.3	9.2	9.3	0.23
運輸	3.6	4.4	5.0	5.7	5.1	5.6	5.5	5.4	5.3	0.23
対事業所サービス	0.3	0.5	0.5	0.7	1.1	1.3	1.2	1.2	1.1	-0.04
対個人サービス	0.4	0.4	0.4	1.0	0.9	0.7	0.7	0.8	0.8	-0.15
その他サービス	1.8	1.0	1.0	1.5	1.3	1.3	1.2	1.1	1.1	-0.99

図 16. 貿易財輸出内訳推移

(単位：2005年価格、兆円)

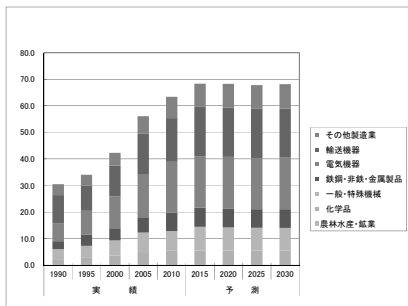


図 17. 貿易財輸入内訳推移

(単位：2005年価格、兆円)

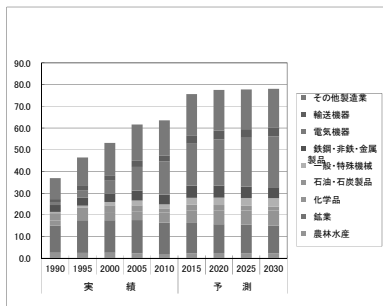


表 16. 実質輸入部門別推移

(単位：2005 年価格、兆円)

	実 績					予 測				2010～30年 平均成長率
	1990	1995	2000	2005	2010	2015	2020	2025	2030	
総合計	46.1	55.6	62.8	72.5	73.8	87.1	89.3	89.0	89.0	0.94
農林水産	2.5	2.4	2.5	2.2	2.0	2.2	2.4	2.3	2.3	0.73
鉱業	12.6	15.1	15.0	15.4	14.5	14.0	13.4	13.1	12.8	-0.59
製造業計	21.8	28.9	35.6	44.0	47.1	59.4	61.9	62.4	63.0	1.47
化学品	2.3	2.9	3.7	4.0	4.7	5.8	6.4	6.6	6.9	1.90
石油・石炭製品	3.4	3.0	3.1	2.7	1.8	2.7	2.5	2.1	1.7	-0.29
一般・特殊機械	0.6	0.8	1.6	2.2	1.9	3.0	3.3	3.7	4.0	3.86
鉄鋼・非鉄・金属製品	3.2	3.7	3.8	4.5	4.5	5.6	5.5	5.3	5.0	0.56
電気機器	1.3	3.2	6.1	10.9	15.3	19.3	21.4	22.4	23.5	2.18
輸送機器	1.4	2.1	2.1	2.8	2.8	3.7	4.0	4.0	4.1	1.92
その他製造業	9.6	13.1	15.2	16.8	16.1	19.3	18.8	18.3	17.9	0.50
サービス業計	9.2	9.2	9.7	10.8	10.3	11.4	11.7	11.3	10.9	0.27
商業	0.4	0.2	0.8	0.7	1.0	1.3	1.5	1.5	1.5	2.24
運輸	2.3	3.0	3.4	3.7	3.2	3.7	4.2	4.1	4.0	1.25
対事業所サービス	0.8	1.1	1.2	1.0	1.2	1.4	1.4	1.4	1.4	0.88
対個人サービス	2.7	2.7	2.6	2.8	1.7	1.6	1.4	1.0	0.6	-4.94
その他サービス	3.0	2.3	1.7	2.6	3.3	3.3	3.2	3.3	3.3	-0.01

結び

人口一人当たりの可処分所得が今後それほど増えないこと、民間設備投資は低い伸びにとどまることを前提に、2030年までの日本経済の姿を描いた。人口の縮小の影響が大きく、日本の経済規模は縮小していく結果となる。円安により賃金格差が縮まっていること、海外における生産リスクが再認識されてきていることから、一部では企業生産の国内回帰の動きが伝えられている。また、日本の安全、魅力が見直され、円安もあって観光客が急増していることなどは、本モデルが取り込んでいない近

年の新たな変化である。

今後の我が国の産業において、わずかな変化ではあるものの、プラスの伸びを継続する産業とマイナスの伸びに陥る産業とが、かなり明確に見分けられるのが産業連関モデルによる分析の特色といえよう。その原動力となる投資と労働生産性の動きに注目する必要がある。人口減少、少子高齢化の進展が低需要、低投資をもたらし、経済の低成長を招いている。人口減少下にあっても、労働生産性が大きく改善すれば経済成長の可能性はあるが、本モデルでは、労働生産性は基本的には過去のトレンドを引き継ぐと仮定している。産

業ごとに近年の新たな傾向を踏まえ、さらにきめ細かな労働生産性についての仮定を置けば、また異なる姿が見えてこよう。

我が国の長期低落傾向はモデルの予測結果のとおり明らかである。この傾向を打開するためには、過去からの延長線に沿って地道な改革努力だけでなく、過去のしがらみにとらわれない思い切った改革を行う必要があるのではなかろうか。TPP 推進を目指した農業の構造改革、法人税の引き下げ、海外法人の国内参入促進など、国際化に向かった制度面の改革のほか、教育制度改革、少子化対策、職場における女性の地位向上などの人材育成策により抜本的な日本経済の活性化が図られれば、マイナス成長という暗い予測を避けることが可能かもしれない。財政赤字の縮減、医療・年金制度改革など、消費者の未来展望を明るくすることも急務であろう。アベノミックス第三の矢に期待すること大である。

注

- 1 メンバーは今川健中央大学名誉教授、篠井保彦 ITI 客員研究員、小野充人 ITI 客

員研究員。

- 2 アベノミックスは当面、金融面からの施策が中心であり、実体経済を基礎とする産業連関モデルではその取り込みが難しく、このモデルではその一部しか考慮していない。
- 3 JIDEA モデルの構造および BTM の詳細は <http://www.iti.or.jp/jidea.htm> を参照。
- 4 ベースラインの元データおよび推計結果は 2 月下旬 ITI ホームページで公開の予定。
- 5 失業率は、労働年齢人口に労働力率を掛けた労働力人口から就業者数を引いて、失業者数を求めて算出。
- 6 2014 年末より原油価格が急落し、2015 年初頭には 1 バレル 50 ドルを切る状況となっている。この価格をモデルに反映させると 2030 年時点で GDP デフレーターは 2.4% 低下し、実質 GDP は 2.3% 拡大する。この詳細は 3 月末本研究所の報告書にて公表する予定。
- 7 年齢が 15 歳以上の人口。
- 8 労働年齢人口の何%が労働市場に参加するかを示す。
- 9 米国 INFORUM の維持する BTM (バイラテラル世界貿易モデル) の予測値を修正して使用。BTM については <http://iti.or.jp/BTM.pdf> を参照。